
プレイヤー

零光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレイバー

【Nコード】

N4545B

【作者名】

零光

【あらすじ】

自分がゲームの世界でそのまま主人公になって遊べるゲーム『ブレイバー』が公開された。今までには考えられないような内容で今世紀最大の発明とまで言われたこのゲーム。その中で主人公の敦はアツシ様々な体験を経て……

FILE 1：開かれた世界

俺の楽しい休みが終わってしまった。

昨日まで春休み。

今日、新学期。

2221年4月

俺は高校生活三年目の大事な時期に突入してしまった。

なんせこの時期、俺や俺の友達の脳裏に嫌でも浮かんでしまう言葉は『受験』という憎い憎い単語だ。

そもそも俺よりも早くその『受験』に向けて戦準備をしている友達もいたが、俺は今日この日まで勉強なんて学校での義務範囲しかやってない。

昨日も友達と休みを満喫していたのだ。

おかげで今は布団の中。暖かい羽毛布団が俺を包んで……

「ねえ……むう、起きろっ！」

俺の羽毛布団は一瞬にして奪われ、視界に人影と俺の部屋が見えた。見慣れた顔で仁王立ちしている俺の妹。

毎日俺を眠りから覚ます小さい魔物。最近は『おにいちゃん』なんて可愛く呼んでくれないし。

「敦^{あつし}は一年365日私が起こしてあげないと一日中寝てそうだなあ、全く。今日から学校なんだし、……二度寝するなっ！」

俺のことを名前で呼んでくる妹。今日から中学生。

俺も中学のときあったよなあ……。

「今日くらい自分から起きるかと思っただら……私だって今日はいつもより早く起きたのに」

早く中学に行きたいのか？

今日何かあったっけか？

いいからさっさとあっちに行け。

俺は妹に剥れた^{はが}羽毛布団を恋しく思いつつ、渋々制服に着替え少し懐かしい通学路へ。

妹が小学生のときは同じ方向だったので仕方なく一緒に行っていたが、中学は反対方向。

今日からお荷物の減った通学を堪能してやるさ。

「とおりやあつ！」

俺は突然何者かに飛びつかれた。

誰かは分かっているのです。ここまで身の危険は感じないけど。

後ろから飛びついてきていきなり首を絞めてくる馬鹿。

毎日何故か通学路では一緒になってしまうクラスメート。

「敦っていつも無防備だなあ。って……今日は一人？ 可愛い妹さんがいないじゃん？ どうしたどうした？」

毎日このハイテンションが続いている^{ながや}永谷はかれこれ6年間の付き合いになる。

中学からずっとのいわゆる腐れ縁。

「あいつは今日から中学。反対方向」

こいつには用件だけで十分。

「そかそか。それより敦。一応聞いておくが忘れてないよな？ 今日がどれだけ大事で、素晴らしい日か」

新学期到来。か？

「馬鹿か！ いやお前はメガ馬鹿だ。宇宙銀河系ナンバー1馬鹿だ」

いつに無くハイテンションな永谷は人差し指を頭にぽんぽんっと何かを示すような動作をするといきなり俺にその人差し指を向けてにやりと微笑んだ。

「今日は誰もが望んだブレイバーの公開日だあっ！！」

ブレイバー。

今世紀最大の発明とも言われているこのゲームは、プレイヤー自身が武器を持ちストーリーを進めていくRPGゲーム。

何が今世紀最大の発明なのかというと、コントローラーやマイク、OS等は必要とせず、専用のシヨップが全国各地にオープンしてそこにあるカプセルに入ると脳内なんたらかんたらとか言う俺たちの脳にアクセスしてあたかも俺たちが本当にその世界にいるような感覚でゲームが出来るというものだ。

詳しくは今日の午後5時一斉公開らしいのだが、噂によるとその世界では時間の進みが現実世界の20分の1、つまりそのゲームを20分しても現実世界では1分しか経っていないということ。またその世界では何もかもが本物のように感じられるらしい。さらにカプセル数も全人口の99%くらい用意されているそうなので混雑する心配もないらしい。

このゲームについては脳波に異常をきたさないかとか、様々な質問が各マスコミや専門家から飛んでいたが安全が証明されたらしく、マスコミも専門家も認めているようだ。

我ながらそんなゲームの公開日を忘れていたとは不覚だ。妹が言っていたのもこれか。

「敦はいつもこうだからなあ……。ああ、そういえばジョブ何にするか決めたか？　俺は魔術系統がいいかなと思ってるんだけど」

ジョブというのはいわゆる役職みたいなもので、本当に数えなくなるくらいの種類がある。

戦士に剣士、魔術師に盗賊、召喚士や猫耳なんてジョブまである。戦えそうに無いジョブも多々あるが、その辺は遊び心なんだろうか。

「俺はまだ何とも……。浪人生は嫌だけだな」

そんな話が尽きぬまま俺たちは学校に着いてしまった。

今日は学校中がプレイヤーの話題で持ち切りだろう。

先生たちだって今日は残業する気もないだろう。

俺は目の前のモニターに映し出されている校長の見事な禿頭とくだらない内容の話を眼中にいれずにただプレイヤーのことを考えていた。

クラス中同じようなことを考えている奴らが多いはずだ。

いつもより騒がしかったり静かだったりした学校が終わると俺は永谷と一緒にプレイヤーのショップへ行った。公開約2時間前だが、ショップの前に着いたときには人だかりが出来ていた。

「人多いなあ……。まあ人数分以上のカプセルは用意されてるんだし、

のんびり行こうぜ。」

永谷はのびをしながらそう言い、まだかとか言い続けていた。人だかりはまさに老若男女問わずといった感じで見ているだけでも少し楽しめた。

エプロン姿の主婦や張り切ってるコスプレ男、明らかに根暗の人や杖もちお婆ちゃん。そして俺たちのような学生。

そしていよいよ公開一分前。

ショップの前は信じられないくらいの人だかりが出来た。俺たちの後ろにも人しか見えない。

恐ろしい影響力だね、ブレイバー！。そついや、俺の妹もいるのかね？

そうこうしているうちにありがちなカウントダウンが始まり、そして――

「ブレイバー……オープン！」

どこからともなく声が聞こえてショップのドアが開いた。が、その後の記憶は無い。

一瞬で俺はカプセルの前にいたのだから。

俺の横にはさつきみたコスプレ男。

そして反対側には永谷がいた。

「俺たちどうした？」

永谷の問いかけに誰も答えられないだろうが、俺たちは瞬間移動でもしたようだ。

俺たちがいる場所は野球場の客席のような配置になっている。
そして野球場で言うマウンドには司会者のような若い男が一人立っている。

「Welcome to プレイバー！ ようこそ皆さんプレイバーへ！ 皆さんは入り口からここまで混雑が予想されたために自動で転送させていただきました。それでは早速ゲームの説明をさせていただきます」

ウェルカムトゥ

驚いたものだ。文明の発達というのは凄いね。全く。

そしてさっきまでざわめいていた人たちが静かになった。

このゲームの説明を聞き逃すまいとしているようである。

なんせこのゲームは体感型RPGというだけで詳しい内容やクリア目標など全てが公開されていない。

つまり謎だらけのRPG。

情報漏れも無く今まで誰もこのゲームについての詳細は知らないのだ。

「まず操作方法ですが、恐らく細かい説明は要りません。自分の体で動くんですから。魔法などの詠唱や必殺技についてもレベルアップや新しい魔道書を手にいれた時に脳裏に浮かびますので。分からない事があればご自分でコマンド、ヘルプと言ってください。自動でメニューが開きますので。帰りたいときはログアウトと言ってください」

声に出すだけでメニューが開く？
んなアホな。

「続いてこのゲームの目的ですが、自由です。何をしてもかまいません。コロシアムで優勝するのもあり、フィールドのボスを倒すの

もあり、コンテストで優勝するのもあり、商売、交流、好きにどうぞ。但し、犯罪行為はいけませんよ。しようとしてもすぐに強制ログオフされてIDが消滅してしまい二度とプレイヤーにログイン出来なくなりますのでね。またこのゲームではパーティを組む事が出来ます。1パーティ三人までで一緒に行動できます」

少しずつ周りが騒がしくなってきた。早くしろだとか様々な声が聞こえる。

「もう少しお待ちくださいね。ゲーム中にお知らせなどが合った場合はショートメッセージが送られます。メッセージはメニューから閲覧可能です。メニューを開くときはメニューと言っていたら自動で開きますので。もちろんお友達間でメッセージのやり取りが可能です。その辺の項目は全てメニューのヘルプに入っているのでご確認ください。またゲーム進行状況のセーブは自動で脳に記録されますのでご安心ください。またログインすると最初にジョブエディットが開きますのでご自身のジョブを登録してください。最後にフィンプルの森は立ち入り禁止地区です。そこは中枢サーバがあってプレイヤーは立ち入り禁止です。門番のモンスターはプレイヤーには倒せません。……あ、HPが0になる、つまりパーティ全員が全滅、ゲームオーバーになるとパーティ全員レベルが1に戻ります。過酷なルールですので頑張ってくださいね！ お待たせしました！
それでは、レッツログオン！」

いよいよだ。

俺は期待に胸躍らせログオンした。

ーここから全てが始まる。

FILE 2：夕焼け

ログインした俺を待っていたのは何も無い真っ白な空間と一人の女性。

こんな事を言うのもあれだが、素晴らしく美人で更に可愛い。

この世界にこんなに可愛い人がいるものなのかと思うくらいに。

「いらっしやいませ、敦さん。早速これからジョブを選択してもらいます。またハンドルネームも設定できますのでご利用ください。

また、ハンドルネームは今後変更できませんのでご注意ください。」

そう言うとその超可愛い美人女性にはっこり微笑んで姿を消してしまった。

と同時に俺の目の前に液晶画面のような感じでメニューが映し出された。

これという原理なんだろう？

しかもカーソルが自分の思ったところに勝手に移動して、選択も何もかもが思うだけで出来るのだ。

楽しいなこれ。

目の前に映し出されたジョブ一覧には戦闘系、魔法系、回復・補助系、その他というフォルダが開いていてそこから自分のなりたいジョブを選択するようだ。

確か永谷は魔術系とか言ってたよな。

何となく人と同じのは嫌だという反射から戦闘系のフォルダを選択するとそこには数多くの役職が表示されていた。

戦士、剣士、アーチャー、格闘家……等等。

こんなんじゃないやどれを選んだら良いものか分からないよなあ。

そう思っていると自動的にカーソルが一つの項目を指していた。

二刀剣士？

何？　これがお勧めってことなん？

そう考えているだけで自動的にその役職についての説明が表示された。

二刀剣士、盾などを装備できない代わりに剣を二本装備できる攻撃型ジョブ。動きも素早く連続攻撃も繋げ易い。特殊能力：他のジョブより連続攻撃回数が二回多い。

俺は条件反射的にそのジョブを選んでいた。

別にどのジョブにするか決めてなかったんだし。

すると俺の周りに青い光の輪が現れて一瞬光ったと思うと俺の服装は制服からいかにもゲームの中の剣士みたいな姿に変わっていた。

防御には不安がありそうですが。

自分の服装を確認していると再び目の前のメニューが開き、今度はハンドルネームを入力してくださいという画面が出ている。

かと言って俺は今までハンドルネームなんて物は一切使った事はないし、すぐに閃く様な発想力も無かったために本名をカタカナに直すだけ、アツシで決定した。

「お待たせいたしました。それでは最初の拠点となる町、エルポアへと転送致します」

そんなアナウンスが響くと俺は一瞬で洋風の町へ移動した。看板には『エルポア　夕焼けに吞まれる町』なんて説明書きがある。

ここの風景は本当に素晴らしく、今まで見たどんな景色、ましてや

CGよりも美しかった。

あたり一面が夕日でオレンジ色に輝くように染められ、建物がより美しく見えた。

そんな風にこの風景に感動していると早速メッセージが届いた。

お知らせ

アツシ様は無事本登録完了しました。

ここからはあなた自身の物語です。

どうぞブレイバーの世界をご堪能ください。

分からない事があればコマンド↓メニューで！

ちなみにこのメッセージも俺の脳内で勝手に開いて読んでいる。

何とも不思議な感覚だ。

「とおりやあつ！」

後ろから突然飛びついてきたのは黒いマントをつけて赤いマフラーなんかしている永谷だった。

それ、何だよ。

「これ二色魔術師ってジョブらしいぜ！ 回復も攻撃も可能な万能型ジョブ。で、お前のは剣士？」

二刀剣士だとさ。なんだかいろんなジョブがありすぎてなんだか良く分からないな。

とりあえず他の人たちも続々とジョブを選択してエルポアにログインしているようだ。同じ服装の人は見ていない。

「あ、そくだそくだ、早速俺たちでパーティ作ろうぜ！……って、

パーティってどうやって作るんだよ？」

困ったときはコマンド、ヘルプだろ？
というわけで早速使ってみる事にした。

するとまたもや目の前に画面が広がって、しかも勝手にパーティの作り方の欄が出ている。

「パーティを作成するにはお互いがパーティを組む事を了承していただければなりません。了承している場合お互い右手で握手することでパーティを組む事が出来ます。解散するときは左手で握手してください。また特殊ジョブで右手、もしくは左手で握手が不可能な場合は各ジョブのヘルプをご覧ください。パーティ間では意識しない限り味方へ攻撃は当たりません。またパーティを組んで一緒に冒険できるのは一度に3人までです。」

握手だけでパーティが組めるってのも凄いな。この世界はどこまで文明が発達してるんだ？

「ま、とりあえずさ。やってみようぜ」

クラスメートとわざわざ握手するって言うのもなんだか変な気持ちだが、何となく騙された気持ちで握手つと……。

すると握手している俺たちの手首に赤いリングがついた。
何やら文字が刻んである。

無題。

何の事だかさっぱり分からなかったがタイミングを計ったかのよう

にメッセージが届いた。

『パーティが組まれました。まずはリーダーを決めてください。その後チーム名を決めてください。あなたが所属した事のあるチーム名は10個まで腕輪に記憶されます。詳しくはヘルプをご覧ください。』

「だとさ、じゃあとりあえずお前リーダーでいいよな。で、チーム名かあ……何にする？」

俺リーダーかよ!?

とりあえずチーム名……っと

「そっぴゃお前はどんなHNでログインしたんだ？俺は普通にアツシだけど」
ハンドルネーム

「お前そのまんまだなあ。俺はながやんだ！カッコいいだろう！」

お前の方こそそのまんまでかつダサイと思うのは気のせいだろうか。
永谷だからながやんって。
酷いだろ。

全世界の長谷さんに謝れ。

「ってことはこの世界ではHNで呼び合ったほうが良いんだろうな。
まあお前は変わらないけど」

そうですね、ながやん。
なんか笑えてくるなこれ。

さて、本題に戻ってチーム名って。

「あ！ アツシアツシ！　こんなはどう？　アツシとながやんだからアツちゃん！」

「超ダサイ。却下」

俺はたつた今こいつのネーミングセンスに頼ってはいけない事を思い出した。

こいつの家では犬を三匹飼っているのだが、名前がそれぞれポチ1世、アンドリアーナ2世、バウバウン3世。

可愛そうだろ？　犬たちが。

せめてポチ1世、2世、3世と統一感を出せ。それでも十分酷いかな。

もちろん名付け親はこいつだ。

さて、二人のパーティで一人が駄目だとするとチーム名を考えるのは俺しかないわけ。

何か無いかと辺りを見回しても綺麗な風景と夕焼けくらいしか見当たらず……夕焼けか。

「あのさ」

「あのさ」

二人が同時に同じセリフを発してしまったせいで俺たちは硬直してしまった。

こんな所で意気投合する必要もないのに。

「先どうぞ」

こいつの考えなんて大した事ないだろうけど一応聞いてやろう。

「あのな、今そこをすんごく可愛い子が通ったんだけどさ、それで思いついたんだチーム名！ 名づけてっ！ 俺たち彼女募集中！！」

「大却下！」

もういい。こいつのネーミングセンスというよりも発想に疲れさせられる。

「で、お前は何??」

まあお前の、俺たち彼女募集中、よりはマシだろうから少し堂々と発表できそうだ。

「まあ、何となくだけど夕焼けが綺麗で印象深いんで英語にしてサンセットとかはどう？」

すると永谷ことながやんはぼかんとした顔をしている。
なんとなくサンショウウオが思い浮かぶような顔だ。

「おっ……お前」

「ん？ 駄目か？ サンセット」

何故かよろよろと俺のほうへ歩み寄ってくるながやんからは何故だか恐怖さえ感じてしまった。まあ、勘違いだったんだが。

「お前！　よく夕焼けの英語訳がサンセットだって分かったな！
凄えよ！　うんうん。ながやんは感動したぞ」

……こいつ　どこまで俺が馬鹿だと思ってるやがる。

あくまでもリアルでは俺高3だぞ？

英語だって偏差値45くらいは……。

「いいじゃんいいじゃんサンセット！　確かに俺たち彼女募集中だと女の子をメンバーに入れにくいもんな。うんうん」

そこかよ。

ながやんがにこにこ頷いているのを見ると腕輪が光って無題だった文字が徐々にサンセットに変わっていった。

本当に良く出来てやがる。

「というわけでサンセット設立完了っ！　よし行こうぜアツシよ！」

結局俺がリーダーになって出来上がった即席チーム、サンセット。

……この先大丈夫なんだろうか。

FILE 3 : on Field

即席のような流れで設立されたサンセットこと俺とながやんの二人のチーム。
ところで。

「俺たち目的とかある？」

どうやらこの世界では色々な事が出来るらしいが、せっかくチームとしてパーティ組んだんだし、何か目的があってもいいと思うんだが。

「じゃあ……とりあえず雑魚には勝てるくらいにレベル上げようぜ！俺たち今1レベルだろ？アイテムとか装備も初期装備のままじやどんどん置いて行かれちゃうしな。そういえば俺たちのステータスってどうなってるんだ？」

ステータスか。確かに気になる項目ではある。

もう慣れはしたがステータスが見たい。そう思うだけでステータス画面が開いた。

チーム：サンセット

アツシ、二刀剣士、レベル1

ながやん、二色魔術師、レベル1

「……なるほどね。確かにこのままじゃ酷い^{ひど}よな。じゃあ手始めにレベル上げでもするか」

レベル上げをするためには敵を倒す必要がある。

そして敵がいるフィールドへはエルポアの南門から行ける様だ。

何でそんな事が分かるのかというと俺の視界の右上にマップが表示されたからだ。

本当に便利すぎてこの世界に住み着く人もたくさん出てきそうなんだが気のせいかな？

早速南門に着くとそこには俺たちと同じ事を考えているような人がたくさんいた。

「うおー！　　すげえな！　大混雑満員御礼完売中って感じだな！」

訳わからねえよ。

ながやんは子供みたいにぴょんぴょん跳ね回りながら俺の周りを子バエのように周っている。

「とりあえず行こうぜ。先越されるぞ」

そう言ってながやんの手を引いて南門の受付らしき女性に話しかけた。

これまた超可愛い。ってか、さっきと同じ人？

「こんにちは！　　ここではフィールドへの転送を行なっています。

転送場所はパーティの平均レベルによって変わり、一度行った場所へはいつでも行く事が出来ます。お客様方の平均レベルは1ですので転送場所は森林モーション、目的はボス撃破となります。よろしいですか？」

「イエッサ〜！」

ながやんの何とも気合の入っていない返事と受付女性の笑顔を最後に俺たちはエルポアの南門から森林モーロンへと転送された。

…… 本当の森じゃないのか？　ここは。

明らかに森のにおいがするし、木は本物のようだし。

このゲームの底が知れないね、全くさ。

「なあなあ。あれって敵じゃね？」

ながやんが指差す方向には驚^わみたいな鳥が一匹。
強そうに見えるんだけど。

「大丈夫だって！　ここってレベル1用のマップだろ？　だったら瞬殺されたりはしないだろうしさ」

それもそっか。

その驚に近づくとも自動的に俺の両手に剣が出てきた。

剣の名前は……ぷ プラスチックソード？

プラスチックって…… そりゃ無いぜ。

「お前プラスチックってさあ。散々だな。俺のは……ま、魔法用の本……」

プラスチックソードと魔法用の本。

明らかに弱い装備名感丸出したがレベル1なんだ。しょうがないだろ。

「戦えない事はないんだろ？　行くぞ！！」

俺は不慣れな構えで剣を二つ構えた。
プラスチックだからかは知らないが軽いので振りやすそうだ。
学校の授業で少し剣道もやった事があるし、……まあどうにかなる
だろ。

俺は思い切って鷲に近づき思いつき鷲の頭に剣を叩き付けた。
すると見事にポキンという音とともに……へ？

見事ポキンと言う音とともに俺の剣は2本とも折れていた。
俺の目の前には俺と同じくらいの背丈の鷲。
ありえねえ。

鷲は羽根を広げて思いつきり風を起こしてきた。
覚えているのはそこまでだ。

俺もながんもその一撃でエルポアの南門まで戻ってきていた。
もちろんレベル1で。

「今のでレベル1専用エリア……かよ」

今は受付の美人おねえさんがエリアを間違えたんじゃないかと言う
ことしか思いつかない。

ながんは俺の横で伸びきっている。

そもそもプラスチックソード折れたけど？

俺は再びステータスを確認してみた。

プラスチックソード：破損

おいおい。

どうやら壊れた装備はそのままらしい。

これじゃあ俺レベル上げどころじゃないぜ。

「そついやさあ、俺たち所持金あつたつけ？」

所持金。ながんの一言で俺は思いついた。

もしかしてプラスチックソードはあくまで初期装備で、道具屋とか武器屋でアイテムを買いなさい。

そついうシナリオなんじゃないかと。

案の定読みが当たり、俺たちは各自最初から所持マネー3000という状態だったことがわかった。

しかもそのマネー確認画面を開いたときに

今の装備はあくまで初期装備です。

武器屋、防具屋はエルポアの町の東にありますのでご利用ください。

だとき。

こついう所は親切設計じゃないのね。プレイヤー。

最初に教えるよ。

きつと半数くらいが俺と同じ運命を辿つたとき。

仕方ないので俺たちは東へ向かい武器を買うことにした。

「へい！　らつしゃい！」

武器屋の店主はこれまたいかにも鍛冶屋といった容姿で俺を待ち構えていた。

そして売っているアイテムリストが表示された。

銅剣：200

銀剣：1000

金剣：2500

プラスチックソード：10

……ひどいよな。プラスチックソード。

俺の場合二本装備する必要があるんで控えめに銅剣を二本買ってた。
いた。

なんせ防具も必要なんだからな。

「買い物完了っ！」

ながやんの声がしたので振り向くとそいつは魔道書を手に抱えていた。

「アツシも買ったか？ いやあ……最初に気づくべきだったよな。
こういうのさあ」

まったく。

防具のほうもやっぱり初期装備だったらしく防御力0。
店で売ってる一番安いもので防御力15。

この差は何なんだろう。

とりあえず俺とながやんの買い物も終わり俺たちは再び南門の前にいた。

「よし！ こんどこそあの鷲を仕留める！」

お前はさっき何にもしてないだろ。
そう思いつつも転送は開始され再び同じエリアが俺たちの前に現れ

た。

そしてさっきと同じ驚もいる。

「今度こそ行ける！……はず」

俺の不安を少し増幅したながやんの語尾だったが、行くしかない。

俺は先ほどと同じような感じで驚に切りかかった。

すると先ほどとは違いバスっと言う効果音とともに驚の頭上に64とか言う数字が現れた。

きつとダメージ数だろう。

そして反撃をしようと思いが羽根を広げたときにはながやんが魔法を詠唱し終え、小さな炎が驚を囲んでいた。

ダメージ76。

その表示とともに驚は姿を消した。

なんかさっきと違って拍子抜けだな。

「おお！ 驚がご臨終したぞ！ 俺たち強いじゃん！」

ご臨終って……。

とにかく雑魚には勝てるようにはなつたみたいだな。

「ま、油断しないで行こうぜ。ボス倒さなきゃいけないんだろ」

ここの目的はボス撃破。ボスなんだから今の驚より強いだろうし。

俺たちは森の中をあちらこちらと歩き回りその都度見つけた雑魚はすべて倒し、いつのまにかレベルも9になっていた。

「俺たち強いよなあ！ 武器買ってから負けてないじゃん？ やっ

ば才能があるんだよな！」

ちなみに俺はこのセリフを3回は聞いた気がする。
こいつのハイテンションはしばらく続きそうだ。

……しっかしボスはどこだ？もう雑魚は一撃で倒せるくらいになつて
るし、そろそろお出ましでも良い頃だが。

フィールドでは町と違ってマップは出ないためここがどこなのかは
俺自身分かっていない。

同じところを回っている気はないが、ボスらしい面影も見えない。

スマン。訂正。

目の前に現れた。

「うおえ？ なんじゃこりゃあ！」

ながやんの驚きようも分かるが、今の言葉じゃこいつの説明には足
りてない。

目の前に聳^{そび}え立っているのは大きな大樹。

そいつに口があって手が生えている。

しかも分かりやすいことにその大樹の頭上に”BOSS”としっ
り表記してある。

ただ問題なのはそのでかさだ。

6メートルくらい……か？

とりあえずでかい。

「こいつを倒せばこのフィールドはクリアか。じゃあさっさと倒し
ちまおうぜ」

別にでかくても倒せないわけじゃないだろうし、俺は恐怖心は抱い

ていなかった。

今までに倒してきた雑魚の数も軽く100くらいはあっただろうし、最初のエリアでレベルが9まで上がったんだから負けるはずもないだろう。

「まあ、そうだよな。じゃあ行くぞお！」

俺たちはその大樹に向かって一斉に攻撃を仕掛けた。

が、響いたのは鈍い音のみだった。

FILE 4 : P R O G R E S S

俺たちが一斉に攻撃を仕掛けた大樹は俺の剣が触れる直前に体にバリアのようなものを張り、自分の体を守っていた。

おかげで俺の剣は大樹には届かず、ながやんの魔法もそのバリアの前で消えてしまった。

ボスなんだし、そう簡単にはいかないか。

「こういうボスって弱点必ずあるんだよな」

バリア張るってことはそのバリアを破ってしまえば良さ。

「あ！ 分かったぞ！ よっしゃ」

何が分かったのか知らないがながやんは一人で大樹に突っ込むと魔法の詠唱を始め

「いつけえ！」

ながやんの手から発射された炎は大樹の葉の部分へ飛んで行き、燃え広がった。

大樹の頭上には少しずつダメージが蓄積されている表示が出て、倒れた。

俺たちは無傷でボスを倒してしまったようだ。

「ボス撃破あつと。大した事無いな。うん」

今回はこいつのいい所独り占めか。

大樹がいた場所にはワープゾーンと表示された魔方陣ができていた。これで町に帰れるようだ。

1時間くらいはこのフィールドにいたろうし、そろそろ帰るか。

その魔方陣の上に乗ると俺たちは南門に立っていた。

本当にどうなってるんだか、この原理は。

しかも本物のように感覚は残っている。

剣の重み、フィールドの空気。

文明はここまで進んでいるのか。

俺がそんな事を考えているとメッセージが届いた。

アリーナ開催のお知らせ

エルポアの町中央広場の施設にてトーナメント形式の大会を開催することになりました。

優勝者は最強の剣士エンダスとのエキシビジョンマッチに出場することが出来ます。

パーティ毎に予選を行います。予選開催日はこの世界の3日後。受付は2日後までです。

制限レベルはありません。またこの試合のみ敗北してもレベルが1に戻りません。

プレイヤースタッフ

このメッセージは一齐に送信されたようで回りもどよめきに包まれている。

もちろん、俺の横にいる奴が叫ばないはずが無いのだが。

「おい！ アツシ！ こりややべえよ！ どれくらいかって言われ

ると……アオオッ……つてくらいに！」

さっぱり訳が分からん。誰かこいつに正しい日本語を教えてやってくれ。

と、言いつつもこいつが言うことは分かってる。

「出るぞ！ トーナメント！」

お前の意気込みは分からんでもないが、それまではレベル上げ三昧
つてことか。

「モチだ！ よおっし！ やるぞお！！」

俺はながやんに手を引かれまた南門の受付まで来ていた。

……ここまで来たら戻れないってか。

ん？ そっついや……

「お前にメッセージ送るためのアドレスとかまだ交換してないよな？」

これって個人間でもメッセージのやり取りできるんだろ？

だったら知つといたほうが後々役に立つかもしれない。というか普通
通教えるだろ？ 同じメンバー間でくらい。

「おおなるほどな！ でも、もう送れるみたいだぞ？ メッセージ
作成からアドレスで……アッシって出たぞ」

何？

……俺のほうでもながやんと表示された。

どうやらパーティを組んだ時点で自動的にアドレスは登録されるようだ。

「これおもしろいなあ！ さっ！ レベル上げに出発だあ！！」

と、言うわけで俺たちはまたフィールドへ転送された。

FILE 4 外伝：ログイン

アツシ達がレベル上げをしている頃、妹は……

「アイ〜？ 追いてっちゃんぞ？？」

相変わらずようちや……ここではメロンちゃんか、メロンちゃんは足が速いなあ。

私じゃ追いつけないよ。

プレイヤーにログインしたは良いけど、最初から訳も分からずジョブだのハンドルネームだのを選択してしまったせいでマスコットキヤラみたいになっちゃった。

「敦^{アツシ}はちゃんとログイン出来たのかなあ？」

私がいるこの町は夕日が凄く綺麗でうつとりしちゃいそうなくらい。こんな世界にあの兄がいると思うと勿体無い。

けどそんな兄に今は一番会いたくない。

なんでよりによって私の頭に猫耳がついていて尻尾まで生えてるミニス力姿で本名をカタカナになおしただけの姿でいなきゃならないのか。

そもそも。

なんでジョブに猫耳なんてのがあって、勝手にそこにカーソルが移動するのか。

はあ……なんか疲れた。

一緒にログインした友達の……メロンちゃんはすっかりキュア導師とかいう回復専門のジョブになってるし。

猫耳も生えてないし。

なんで私がこんなコスプレみたいな姿を……。

「こおらあ可愛い子猫ちゃん！ ぽけえ〜っとしてると本当に置いて行っちゃうよ？」

可愛い子猫ちゃん。

私の事らしい。

なんか調子狂うよなあ……。

しかもメロンちゃんの目的はコンテストでも商売でもなく、強くなること。

それなのに回復専門ジョブだから戦闘は私の役目。

私が敵を殴るなりして倒す。HPはメロンちゃんに回復してもらう。こんな事はっかりしてるおかげで私もすっかり強くなっちゃって。

最初は戸惑ったけど、新しく武器を買ったらいきなり勝てるようになったし。

なんかこの猫耳ってジョブは相手の動きを予測出来るみたいで攻撃は大体かわせる。

その代わり当たっちゃうと大打撃なんだけどね。

これって本当に筋肉ついたりしないかなあ。嫌だ嫌だ。

結局町に帰ってきたときには私もメロンちゃんもレベルが10くらいになっていた。

「上出来上出来、私も回復のタイミング段々分かってきたよおっ」

私はもう疲れちゃいました。

大体猫耳の戦闘方法がパンチとかの打撃戦って所が納得いきません。

そんな風にメロンちゃんが上機嫌な中、さらにテンションを上昇させるメッセージが届いてしまった。

「……トーナメント開催いつ!? アイちゃん! これは私たちが出るしかないよ!! アイちゃんの悩殺ミニスカ猫耳パンチに私の回復なら優勝できるよっ!」

「メロンちゃん。よく見てよ。キュア導師などの杖装備のジョブは戦闘には参加できないんだよ。待ち時間の回復は出来るけど。私人じゃ戦ったって袋叩きだよお」

大体格闘家とか戦士が出てきたら猫耳が勝てるわけ無いじゃん。

「じゃあメンバーは適当に見つけるとして……きっとトーナメントの受付の付近に同じような考えの連中がたくさんいるって! まあ……前線はかっこいい男の人がいいけどね」

いつもメロンちゃんはこんな感じ。
なんか私には真似出来そうに無いや。

「それじゃあ、トーナメントに向けてアイちゃんのレベル上げ大作戦開始っ! レベルが高いほうがチーム組んでくれる人が見つかりやすいと思うしね!」

「えええっ!? 休みなし〜い??」

結局メロンちゃんに南門まで連れて行かれてまたモンスター倒し。
本当にどうなっちゃうんだろ?

FILE 5：遭遇

「さんげえんざんぶ散撃炎斬武！」

俺にもやつと必殺技らしいのが使えるようになった。

剣の先端が燃えながら斬りかかるといいういかにも初歩的な技だったが、それでも進歩はしたものだ。

当たり前といえば当たり前なのだが。

何故ならおれとながやんはトーナメントに向けてレベルを上げる作業に没頭して5時間はフィールドを歩き回っているのだから。

「さっすがアツシ！ 技も使えてトーナメント優勝への道がまた一歩近づいたな！」

既に俺たちはレベルが20を超えている。

こんなに長い時間ゲームを、しかもレベル上げだけを没頭してやったのは初めてだ。

正直、いい所までは行けるんじゃないかと、俺も思ってしまったている。これで一回戦負けなんかしたらながやんはもちろん、俺も多少落ち込みはするだろう。

……いや、その前に俺たちはトーナメントに向けて重要な問題を抱えていたのでそれが解決してからそんな希望は持つべきだろうか。パーティが二人しかないのだ。

他の連中はトーナメントの為にレベル上げよりも先にメンバー集めをしていたのだ。

つまり、俺たちは余り者。

「なあ、俺たちもそろそろメンバー決めたほうが良いんじゃないか

？ 少なくとも回復は欲しいんじゃないか？ 連戦になるんだし、俺たち二人じゃ決勝まではおるか？ 3回戦前にはHPなんか空に等しくなっちまいそつだぜ」

不運なことに回復役は人気が高く、更に個人で戦えないため人数が他のジョブより少ない。
つまり競争率が高いのである。

「まあそうなんだろうけどよ、人生どうにかなるときはどうにかなるんだし今回だってどうにかなるさ。俺の人生は俺の思うままに！」

この調子である。

昔から変わらないこのながやんは回復役を懸賞のように考えてないだろうか？

「まあ、そろそろメンバー確保でもするか。コンビネーションアタックみたいなのもやってみたいしな」

そんなものあるのか？

とりあえず俺たちは町へ戻るためにこのエリアのボスを倒しに行くことにした。

まあ、レベルを上げる作業に没頭していたので既にこのエリアの適正レベルはとうに超えていたために俺たちは油断していた。
これが仇となるのだが。

大きな大きな蛇が出てきた。

緑色の皮膚は妖しい光沢を放っていて硬そうだ。

赤い目が俺たちを凝視している。まるで蛇睨みの様な効果が現れた

のはその直後だ。
体が痺れてしまっと思って思うように動かない。

「な、なんだよこれ？ これじゃあ動けないまま袋叩きじゃねえか
っ」

ながやんも動けない。俺も動けない。
このままじゃ二人そろってやられてレベル1に逆戻りだ。
今更再スタートなんかしてたまるか。

とはいえこの状況ではどうすることも出来ずにただ硬直したままの俺たちにその大蛇は迫ってくる。
まるで獲物を見つけたかのようなその鋭い眼光が向けられ、さすがに身の危険を感じた。

「デザートハング！！」

俺たちの後ろから響いたその声。
そして大蛇の足場が崩れ突如大蛇は地面へと引きずり込まれていった。
何が起こったかは知らないが、大蛇は消え、同時に俺たちの体の痺れも無くなった。

「うはあああ……怖かったなあ、おい」

ながやんはその場に崩れ落ちてしまったが、俺はすぐに後ろを振り返ってその声の主を確かめた。
そこには細身の男性が魔道書を持って微笑んでいた。

「その大蛇は麻痺攻撃を得意技としています。町の防具屋で状態異

常対策の指輪が売っていますので購入をお勧めしますよ。このゲームは理不尽な箇所がいくつかありますので一般の方々は今のよう麻痺や毒でやられてしまう場合もあるので」

にこやかにこつちを見ているその男の人は魔道書を閉じ、ゆっくり歩み寄ってきた。

「それとも横入りをしてしまったでしょうか？ 横取りをする気は無かったのですが」

とんでもない。あなたのおかげで助かりましたよ。それにしても状態異常なんてまったく考えてなかった。

「特に麻痺は一定時間完全に行動不能に陥りますから。注意する必要がありますね。それより……あなた方はこのエリアで黒い鳥を見ませんでしたか？」

黒い鳥……？ ながやんにも目線を配ったが同じようなことを考えているような顔だ。

まったく覚えが無い。今まで倒した雑魚もキノコとか魚とか鳥もいたが黒いのはいなかった。レアとかか？

「それならいいのですが。それでは失礼しますね」

そういうとその男性はゆっくりと歩いていった。なんとなく優雅に見える歩き方だ。

何だったんだろう？ とりあえず俺たちはお礼を言って町へ帰ることにした。

再び帰ってきたエルポアの町、南門。

「一時はどうなるかと思ったなあ。それにしてもあの人の魔法、あれそうとうレベル高いんじゃないか？」

魔法の一覧とか攻略サイトは知らないので詳しくは分からないが確かに威力が桁違いだった。

レベルの低いエリアボスだったとはいえダメージを示す数値が9がたっくさん並んでいた。たぶん9999くらいだったと思う。

「あんな人がたくさんいるとしたらトーナメントも大変なこったな」とりあえず警告どおり状態異常対策の指輪とやらを買いに防具屋へ行くことにした。

雑魚を大量に倒したおかげでマネーはたくさんある。

指輪を買った俺たちは早速装備してみた。

小さな緑色の玉が入ったごく普通の指輪。

しかし俺がその指輪を見ているときに視界に入った人物が一人。

猫耳で、尻尾が生えているキャラ。

何とも見覚えがあるその容姿顔立ち。

お互いに目が合った。

「おい」

「え……」

「……………」

二人分の沈黙が流れた道具屋の前には俺とながやん、俺の妹と妹の友達と思われる4人が立ち尽くしていた。

FILE 6：猫

防具屋の前にいる俺とながやん。

そして目の前にいる二人の女性キャラ。

猫耳娘と導師がいて、そのうちの猫耳娘のほうは特に見覚えがある。

「お前がここにいるのは分かってたけどさ、なんでそんな格好なわけ？　そういう隠れ趣味か？」

猫耳娘は俺が幻覚でも見ていない限り、俺の妹だ。

それで横にいるのは確かお友達のようにゃんだっけ？

「こんにちは、あいちゃんのお兄さん！　あ、私ここではメロンちゃんなのでよろしく！」

相変わらずテンポのいい子だな。

で、そのメロンちゃんはいいとして。

「うう、なんでこういうタイミングで敦^{あつし}が出てくるのよ……人生の汚点」

こういうタイミングって。

俺のほうが焦るわ。

いきなり目の前にいる妹が猫耳。

一部のコアなファンなら飛びつくような容姿だが、あいにく俺には猫耳属性は無い！

「なかなかお似合いじゃん！　アツシの妹さんっ！　ん、まあ、意

外な組み合わせではあるけど」

確かに俺の妹がこんな姿でいるとは思わなかった。

「私は好んでこんな姿でいるわけではなくて、キャラエディットの時に勝手にこうなってる……不可抗力の依存型の低迷を……」

意味分かん。

少し前までは俺の後ろをちょこまかと付いて来た妹がなんだか遠くなってしまったような。

「とにかくっ！！ 好んでやったんじゃないの！ んゝもっっ！」

頬を膨らませていじけている妹。

「アイちゃんはこんなんでもお兄ちゃんの事いつも考えてるから困るよねえ。なあんてねっ」

そしてメロンちゃんの追撃。

いつも考えてるって……どうやって朝起こそうか考えてるだけとかだったりしないだろうな。

「あ！ そだそだお二人さんさあ良かったら俺たちとトーナメント出ない？ 人数的にも戦闘役3人、回復1人でびったりだしさあ！それに回復役が女の子と来た！ これは実にいいぞ！」

ながやんが俺の肩越しに提案しだした。

しかも顔が近い。離れる。

大体、こんなひ弱そうな二人がトーナメントになんか出るわけ……

「本当にっ！？ 私たちもちょうどメンバー探してたんだあ！ しかもアイちゃんのお兄さんと、そのお友達なら頼りになれそうだし。よし決定！ いいわよね？ アイちゃん？ うん。決定！」

まだ何も答えてない妹、そして俺を置いて勝手に二人で商談を済ませてしまったながやんとメロンちゃんだったが、確かに人数的にはぴったりだ。

しかし初対面でここまで息が合うこの二人は何者だ。新手のグルか？

「じゃあ私たちはアイ兄のメンバーに入れば良いわよね。私たちがチームとしては組んでないから。えっと……握手だよな。んじやよろしくっ！」

なんか流れるように決まったこのメンバー！

妹も投げやり気味になっていたが、知らない人と組むよりは気が楽かもしれない。

女性陣二人の腕にもサンセットの腕輪が装着されメンバーがそろった。

「アイちゃんのお兄さんはHNアツシなんだ。ハンドルネーム兄弟そろって本名をカタカナ表示にするだけなんて仲いいなあ。羨ましいぞっ」

こういうときだけ俺はやたらと妹と気が合うのだ。

朝の洗面所の時間や風呂のタイミングなど。

「ええ？ アイちゃんもメロンちゃんもレベル24！？ 俺たちと一緒に……相当レベル上げてるんだねえ」

ながやんが驚いていたが俺はその言葉を一瞬疑った。

この二人も俺たちと同レベル？
どれだけやってんだよお前は。

「メロンちゃんがすっごい張り切っちゃって、私は付いて行って出てきた敵をぽかぽか殴ってたら勝手に……」

俺は猫耳の妹が敵を殴っている姿がなんとも滑稽こっけいに思えるのだが、とりあえず即戦力にはなりそうだ。

「だって私はトーナメント優勝バリバリ目指してるんだからっさ！
あ、アイちゃんのお兄ちゃんもせっかくHNあるんだし、アツシって呼んじゃって良いかな？ お友達はながやん。やっぱ上下関係は気にしたほうがよろしいでしょうか？」

メロンちゃんは現実でもこんな性格だ。
別に良いよアツシで。

「了解了解っ！ よおし、じゃあアツシ率いるサンセット、トーナメント優勝に向けて前進開始っ！」

偶然なのか運命なのかは神にでも聞かなきゃ分からないが、俺とながやんそしてメロンちゃんに俺の妹ことアイを加えたサンセットはトーナメントの受付をしにエルポアの中央広場に向かうことにした。

FILE 7：訪れ

「何で？ どうして？ Why？」

トーナメント受付ではこんな声が飛び交っていた。

もちろん俺のメンバーでも特にやる気のあった人たちはその罵声に混じって暴れださんと腕まくり。

この二人は仲良くやっていけるんじゃないか？

オーラが似ている気がする。

その腕まくりをしているのがやんとメロンちゃんの頭越しに見える電光板にはこう書かれていた。

諸事情によりトーナメントは中止します。

それだけ。

俺はいまだにこの諸事情という意味をうまく捉えることが出来ないんだが。

「アツシいゝ何て書いてあるの？」

背の低い俺の妹はなぜかえへらつとした笑みを浮かべている。

トーナメント中止だとよ。

「ふうん……へ？ 中止？ なんで？」

こつちが聞きたいくらいだ。

そんな騒ぎの中突如周りの空気が変わった。…様な気がした。

ふと空を見上げた俺の視界に何か黒い物が写った。

何だ？

黒い……鳥？

何処かで聞いたような。

「あ、アツシいなんか発表あるみたいだよ」

妹が腕を引っ張ったので俺は現実に意識を戻した。

どうやら代表者による諸事情とやらの説明があるらしい。

「どこのどんなどいつがトーナメントを潰したって言うの？ さあ出てきなさい！」

既に興奮状態のメロンちゃん。

なんか人格変わってませんかあ？

「トーナメント中止の件についてご報告します。率直に言うと禁止地区のフィンプルの森の中枢サーバが何者かによって侵入されました」

フィンプルの森？ 確か一般プレイヤーは入れないんじゃないかったか？

「原因は現在調査中ですが、その間イベントはサーバがダウンしてしまっているために行えません。報告は以上です」

なるほどね。

なんとなくだが言いたいことはわかった。けど、いったいどんな奴が？

「アツシ！ ついに来たな俺の、いや俺たちの時代が！」

いきなり顔を近づけてきたながやんは何故か意気揚々と、輝いた目で俺を見てきた。

なんだ俺たちの時代って。

「鈍いなあ。そんなんだから彼女の一人や二人や三人出来ないんだつ。俺たちでそいつ見つけてサクっと仕留めちゃおうぜ」

彼女の一人や二人や三人出来なくて悪かったな。

というかそんなにいたら浮気だ。ついでにお前も人の事いえないだろうが。

それでもって仕留めるって、誰かも分からないのか？

「燃えるわね！　ながやん！」

そして何賛同してるんだ、メロンちゃん。

この二人は何なんだ？

そしてながやんというセリフがどうも滑稽だ。

ところで、さっき見た黒い鳥のような影。

確か俺たちが助けられた魔道士のようなジョブの人が言ってた。

俺たちが大蛇と戦ったエリアで、このエリアで黒い鳥を見なかったかって。

なんとなく理解できた気がする。

きっと黒幕はその黒い鳥でその人はきつとなんかのシステム管理者みたいな人でウイルスとなるその鳥を追っていたとか。

そんな推理を一人で勝手に進めていると誰かに肩を叩かれた。

不意だったので何か変な声を発したと思うが。

その人物を見たときにまた同じような声を出してしまったかもしれない。

「こんにちは。大蛇戦以来ですね」

目の前にその人がいるのだから。

FILE 8：黒鳥

目の前にいるその人は高貴な雰囲気をした服装で立っていた。
この前とは違う服。衣替え？

「トーナメント中止になってしまいましたね。残念です。私も参加する予定でしたから」

あなたも出る予定だったんですか。
もし対戦していたらこの前の魔法で葬られそうだと。

と、それより

「さっき黒い鳥……だと思っんですけど、ここ上空飛んでたのを見ました。今回の件ってやっぱりその鳥が関係あるんですか？」

そういうとその男性は微笑を浮かべてぽつりとつぶやいた。

「やはり気づきましたか」

とりあえず俺の推理は当たったらしい。

あいにく俺のメンバー三人はちょうど受付の掲示板に張り出されているトーナメント中止に関しての詳細を見ている。

この会話も聞こえてなさそうだと。

「フィンプルの森の中枢に忍び込んだのもその黒い鳥です。管理者はサーバダウンなんて言ってますけど、そうじゃない。何か大事なものが奪われた」

大事なもの？

それよりあなたは何者なんですか？

一般プレイヤーには見えないんですが。

「今は推理好きの魔道士ということとまとめておいてください。それでは私はいろいろ調査しに行こうと思いますのでこれで」

嫌味の無い微笑を俺に向けてその人は人ごみに消えていった。

黒い鳥か。

鳥に忍ばれるとは思っても付かなかっただろうな。

フィンプルの森……ね。

「アツシい？ 今の人だあれ？」

なんとも都合のいいタイミングで帰ってきた妹達。

さて、今の会話は教えるべきか否か。

「あれってこの前俺たちを助けてくれた魔道士さんじゃね？ 強かつたよなあ」

そうそう。

とりあえず俺はそのときのお礼をしていた。と言って置いた。きつと今の話をしたが最後。

この二人はすぐにフィンプルの森に乗り込むだろう。

妹だってメロンちゃんに付いていくだろう。

と、なると俺も行くのが道理だ。

こんなレベルじゃ返り討ちにあう気がする。

「まあいいわ。でねでね。私が思うところによると、この原因はフインブルの森にあるのよ。つ・ま・りそこを叩けば良い訳。簡単な話じゃない？　そこで待ち構えて悪者が出てきたら叩く。4人がかりで徹底的に袋叩きで一撃のキューティータックよ！」

最後のほうでテンションがあがって多少なりとも壊れ……それともこれが元なのかは知らないが、4人って事は少なくとも俺も混ざってるな。

しかもフインブルの森って言うてるし。

悪感が……。

「ねえメロンちゃん？　一応聞くけど、私たちが乗り込むとか言わない……よね？」

妹の引きつり笑いをどう捕らえたかは知らないがメロンちゃんは悪巧みを考えた小学生のような顔で高らかに宣言してしまった。

「その通り！！　私たちが救ってあげようじゃないの！　この世界を！」

以上。

ここまでが今に至る会話だ。
今？

残念ながら俺の目の前の注意書きにはこう書かれている。

この先フインブルの森
一般プレイヤーの進入禁止。

本当に来てしまった。

大体進入禁止なら一般プレイヤーは入れないようにプログラミングすれば良かったじゃないか。

そもそもこんな風に見つかる場所に置かないでくれ。

と、言うかどうかやって見つけたんだ？

「掲示板でいろいろ聞いたの」

平然と言つてのけたメロンちゃん。

わざわざログオフしてネットで調べて帰ってきたそう。

念のためその間レベル上げをしていた俺たち三人も偉いと思う。

「アツシと何かするときつて必ず何か起こるよな。学校で肝試ししたときもドアの開く音がして見に行ったら誰もいなかったとか」

あれはタイミングが悪くて誰にも会わなかっただけで別に何でもないだろ。

さて、本当に行くのか？

目の前は森林。立ち入り禁止。

帰るなら今。

「さあサンセット出発！」

帰れなかった。

結局俺たちはフィンブルの森へと歩み行っていた。

FILE 9：中枢サーバ

うつそうと茂る森。

これは現実世界で表すとどこかね？

多分山奥か何処かの遺跡が見つかりそうな場所だここは。

「悪者が現れるなんて好都合じゃない！ 私たちが退治するのがシナリオよ！」

どうでもいいが、メロンちゃんってこんな性格だったか？

「いつもはもつとおとなしいんだよ。だけど一度^{ひとたび}スイッチが入っちゃうとこのテンションなの。運動会でもこう」

妹は猫耳をぴよこぴよこ動かしながらそう言っているが、そっぴいやお前の姿もすっかり慣れたな。
案外お気に入りか？

「こらアツシ！」

今時 こら と怒られるのもどうかと思うが。

と、言いつつもこいつは案外戦闘では強かった。

現実世界での運動神経の音痴さが嘘のように敵の攻撃をかわし攻撃。いわゆる当て逃げ。

レベルが上がるにつれて回避能力も高くなっていたようだし。

俺ものんびりしてられないねえ。

メロンちゃんが掲示板などで情報を調べている間、俺たちはレベル上げをしていたわけだが正直妹は強かった。

もちろん俺、ながやんもそれなりにレベルは上がったし、技も覚え
たが。

猫耳は優遇されてるのか？

開発スタッフは猫耳属性なのか？

そんなくだらない事を考えていると目の前に見えてきたのは大きな
ドーム。

恐らくこれが中枢サーバだろう。

だが俺はここでふと思い出したのだ。

ログイン前の注意を。

中枢サーバの門番がいて、そいつはプレイヤーじゃ勝てない。
とかいってたような気がする……んですが。

「でも誰かは侵入したんでしょ？ 本当は勝てるのよ！ ええそう
なのよ！」

メロンちゃんの根拠無しの自信は何処から来るのか。

少し俺にその自信をくれと言ってみたい物だ。出来るなら。

「まあそつと覗いて周りの様子を確認するくらいはしよつぜ。一瞬
で全滅はもうこりこりだ」

ながやんの名づけてザ・覗き見で調査大作戦を決行するためにとり
あえず木の間に隠れるという原始的な方法で調査を開始した。
にしてもこいつのネーミングセンスをどうにかしてくれ。

が、このながやん命名の作戦は特に意味が無かった。

その門番らしき獣。

まあ例えるなら犬だろう。

そいつは中枢サーバの入り口でのびていた。

どうやら誰かに既に倒されてしまったようで、ピクリとも動かない。

「わんちゃん？ 起きてよお」

近くまで小走りで歩み寄った俺の妹は勇敢にもその犬を揺さぶつて
る。

いや、起きてもらわなくて良いんだが。

「これは大チャンスよっ！ 今こそ乗り込むときよ！ 行きましょ、
アツシにながやん、アイ！」

わざわざ全員の名前を呼びずんと進んでいくメロンちゃんはき
つと怖いもの無しだろう。

なんで彼女が回復系ジョブなんだろうか。

勇者とかの方が似合いそうな気がしてきた。

とりあえずメロンちゃんに続いて入ったその中枢サーバはいかにも
近代科学的な内装で青い光が壁を伝っている。

そして入って早々、とある人物が出迎えてくれた。

「またお会いしましたね」

もう三度目になる。

「と、言っても今回はそちらが来ることを分かっていた上での再開。
と言った所ですが」

推理好きの魔道士さん。

FILE 10：外部サーバ

そろそろ驚かなくなっただが、目の前にいるその魔道士さんは中樞サーバの入り口で待ち構えていた。

「入り口の犬のような獣を倒したのもあなたですよね？」

「ええ。あれぐらいで侵入を防げると思ってるんですかね？」

にこやかに微笑んでいるが、門番は一般プレイヤーには倒せないようになっていないはず。

「あなたは何者なんですか？ どうして黒い鳥を追っているんですか？」

「もうここまで来たら隠してもしょうがないでしょうね。私は簡単に言うとは違法なキャラでゲームをしている人。まあチートとでも呼ばれるんでしょうかね？ 能力も所持金も魔法でも。好きなだけいじれます。方法は公には出来ませんがね。そして黒い鳥についてですが……」

そこで言葉を切ったその人は少し困ったような悲しんだような顔をして

「私の兄で違法者です。このサーバ全体を乗っ取ろうとしていると思います」

チート、要するに裏技みたいなもんだらう。どうりで強かったわけだ。

一斉公開なのにそこまでレベル差が開くのも変だしな。

「私は兄がサーバを乗っ取ろうとしていることに気がつき、止めようと思いました。しかし兄は自らを鳥へと改造し、鳥人となり一度は捕まえた物の手からするりと抜けていくように逃げられてしまいました。それで行方を追っていたところ初めてあなた方に会った、というわけです」

セキュリティが甘かったのか。
しつかりチェックしとこうぜ。

「でもよぉ、このゲームが公開されたのって今日だぜ？ まだそんなに時間もたつてないのにそこまで話が進むかぁ？」

ながやんは首を傾げて尋ねている。

確かに公開されてからまだそこまでの時間はたつてない。
それなのにそこまで物事を進められるか？

「兄はブレイバーの開発スタッフの一人で皆さんよりも早くブレイバーの内容を知っていましたから。プログラミングも分かっていたんでしょうね。私にも少しだけ見せてくれました」

開発スタッフ？

それがなんでこんな反乱状態になっているんだ？

「兄はプログラミングには強く会社でも戦力になる人材でした。ところがブレイバーの作成途中に意見の食い違いがあったんですよ。よくある話です。これは推測ですが、開発側はモンスターとの戦闘を主な内容と考えていたのに対して、兄はプレイヤー同士の対戦を主な内容と考えていたのではないかと。それで今回の件から外され、

納得のいかなかった兄はゲーム内での復讐を企てた」

なんか俺からしたら難しい話題だがとりあえずはその兄を止めればいいんだろ？

「簡単に言えばそうですね。ですが相手はチートキャラ。一般キャラじゃまず歯が立たないでしょうし、私でもプログラムを書き換えられてしまえば役立たずです」

そりゃ鳥人なんかジョブに無いし、勝てないんだろうね。でもそれじゃどうしようもないんじゃない？

「普通に戦うのでは歯が立ちません。兄がこの中枢から奪ったもの、それはアंकと呼ばれるアイテムです。それがこのサーバのコントロールで自分の好きなようにサーバ全体をコントロール出来ます」
そついうと手を頭上へとゆっくり上げ、呟き出した。

「時を操りし時空の神よ、汝の恩恵を器に、忠誠を我に記したまえ。セリユビユート」

言い終えると同時に地面が銀色に輝き俺たちは周りが真つ黒な空間に移動した。足場も見えないので浮いているような感覚だ。

「うおお？　こりやすげえ！」

ながやんははしゃいでいるがそれどころじゃないだろうが。少しは落ち着きなさい。

「……」

妹とメロンちゃんはすっかり沈黙。

メロンちゃんも先程までの威勢はどこへやら。

で、ここはどこだ？

「ここはテスト用の空間で時間の進みが更に遅い空間です。このようにこのゲームには公にされていないサーバがいくつもあって、イベント用の地区もあれば全く異質なデータの集まりである地区まで様々です」

難しいもんだ。

ところで、これからどうすれば？

「簡単に言いますと、兄からアंकを取り返し、そのアंकを使い兄を強制ログアウトさせます。後は兄の保存情報を破壊してしまえばログインできなくなります」

アंकを取り返すって……どうやって。

「ここと同じような隠れサーバに兄は潜んでいます。兄の能力はメモリに収納されていますのでそのメモリへのアクセスを遮断して能力が一般キャラと同じ程度まで下がったところを狙います。ところで、あなた方が来るのは防犯モニタに写っていたので分かりましたが、今回の事は私に任せて下さい。大丈夫ですよ。対処法はしっかり確認済みですので」

と、言われても黙っていない人がこちらには一人、もしくは二人いるんですよ。

「冗談じゃない！ さつきから聞いてれば日本語とは思えないような会話ばかりで私のこと置いてきぼりにして、ここまで来たのに今更引き下がるもんですかっ！ もちろん私たちサンセットだってその兄を改心させて土下座するまで謝らせてやろうぜ作戦に参加するわ！」

ながやんのネーミングセンスが移ったかのごとく酷い作戦名を勝手に付け加え、威勢が回復したメロンちゃんがかんた。

俺の妹は未だに静まっているが、ながやんもメロンちゃん同様張り切っている様子。

「しかしですね……」

「いいからいいから！ 私たちサンセットは世界の平和を何よりも愛してますってね」

なんか俺までも自分が保てなくなりそうだ。

とりあえず何か出来ることがあったら手伝いますよ。

そんな風にとらえてください。

「そうですか……じゃあせっかくですからお願いしましょうかね。

作業は少ないので終わるのは早いと思いますが。そういえばまだ名乗ってませんでしたね。私の名前はレダです」

そっいえば名前は聞いてなかったな。

で、その作業というのは？

「兄の能力はメモリに収納されているといいましたね？そのメモリが5つあって、4つは破壊したのですが残る一つがまだなのでそれを破壊してほしいのです。それが破壊され次第私が能力の戻った兄

を倒し、作戦を実行します」

なるほど。内容が分かりやすく助かった。

「メモリがある場所へは私が転送します。そこも隠れサーバなのでね。それじゃあ早速お願いします」

楽そうなお仕事だが気は抜いてられないな。

「よっし、いくぞ！」

「サンセット初仕事ね！」

「もう、やる事さっさと終わらせちゃおう」

ながやん、メロンちゃん、妹、それぞれの意気込みも聞いていざ隠れサーバへ。

「天に舞い降りる白衣の憑人よ、異空への錠を開きたまえ。ポートリア」

地面に現れた緑の円に囲われ俺たちはメモリのある隠れサーバへと向かった。

そこで全てが片づく。
そう信じて。

FILE 11： 翻弄

転送されてたどり着いた隠れサーバ。そこには何も無い真っ白な空間と宙に浮いている小さな一枚のカード。
あれがメモリか？

そう思っていると空間に声が響いた。
レダの声だ。

「そのカードがメモリです。そのカードにダメージを与えていけば壊れるので攻撃してください。そのカードが壊れ次第私は兄からアークを奪い兄のチートもキャラも無に変えます」

攻撃か。

俺たちのレベル上げの成果、見せてやろうぜ。
ながやん、メロンちゃん、妹に目配せをして俺は一気にカード目掛けて剣を振りぬいた。

が、俺の剣が触れたのはカードではなく黒い翼。
俺の目の前に数枚の黒い羽が舞っている。

一瞬にして俺の目の前に現れた真っ黒な鳥。

レダの兄であり、中枢サーバからアークを奪った鳥人。

俺の剣は直撃したのだがダメージを示す数字は表示されなかった。
しかもカードはまだ破壊できていない。つまり能力は改造された数値。

勝てない。

そう思った矢先ながやんの声で俺は我に帰った。

「冥界からの叫びよ、苦しみよ、烈火の形へと変わり我が力となれ。
ファイダリングハデス！」

ながやんの使える最高位の魔法は鳥人を炎の中へと閉じこめ業火を
浴びせていた。

「やったあ！」

だが妹の喜びをあざ笑うように炎の中から真黒の羽根が現れ一度の
羽ばたきで炎は全て消えてしまった。

目の前にいるその鳥人は普通の人間に背丈と同じくらいの黒い羽根
をつけた姿で前髪を払う仕草を見せ

「笑止。この程度で俺を止めに来たのか？　ろくにプログラムの知
識も無いくせに俺に楯突こうとはな。すぐにこのアंकの力で消し
去ってくれるわ！」

そう言いこちらへ人差し指を向けた後呪文を読み上げた。

「アंकに命ずる、抹消せよ！　アブリューソル！」

咄嗟に目を閉じていた俺だが特に体に異変は無かった。
何も……起きてないよな？

「くっ……レダめ。余計なことをお！！！」

俺たち4人は何事も無くその場にいた。
そしてこの空間にまたレダの声が響いた。

「まさかこの空間に兄さん、いやマルクが現れるとはね。悪いけどその空間は既に閉鎖空間と化している。その中ではアंकの能力は使えない。そして」

そう言うと俺の目の前にメニュー画面が勝手に開いたかと思うと何か英字の並びが現れて、消えた。

「今彼らに兄さんと同じ能力値を書き込んだから実力は互角。まあ4対1だから兄さんが不利。もう諦めたらどうですか？」

どうやら今の一瞬で俺たち全員的能力を書き換えてしまったらしい。

「俺は……俺は諦めんぞ！ この世界を統治し、神となり、俺の主張が正しいと思い知らせてやる！」

どうやらマルクと言うHNらしいその鳥人は黒い羽根を大きく広げこちらへ向かってきた。

しかしその速度は歩行者くらいの物でかわすのは難しくなかった。むしろあまりに遅いために拍子抜けしてしまった。

ゆっくりと進んでくるその鳥人は俺だけでなく他の三人にも同じ速度で感じているらしく、その翼から放たれた無数の羽根攻撃も全て回避。

今までの敵で一番弱く感じる。

「おいおい、なんか拍子抜けだな」

ながやんは驚いたような顔と嬉しそうな声でそっくり右手をマルクへと向けた。

「天空より振り落とされる神々の鉄槌よ 今ここに！ ジャベリン
グアロー！」

上空に雷雲が現れその中から一筋の雷撃がマルクへと直撃した。

その一撃だけでもうぼろぼろ状態のマルク。
こりゃ本当に拍子抜けだ。

「くそっ……メモリが1枚しか残っていない状態では無理か……」
目の前で今にも倒れそうなまでに追いやられたマルクがいる。
これなら俺たちでも倒せるんじゃないか？
更に

「たあっ！！」

マルクがやられている間にメモリ付近まで移動していた妹とメロン
ちゃんが攻撃したことによりメモリのカードはガラスのように砕け
散った。

つまりもう目の前にいるマルクは普通のキャラと同じ能力値。
一方俺たちはレダに書き込まれた違法レベルの能力値。
これじゃあ勝負にならないだろう。

4人に囲まれたマルク。

そこに追い討ちをかけるようにレダが魔方陣のような物から現れた。

「もう終わりだ。兄さん。これ以上反抗しても無駄です」

ゆっくりと歩み寄ってきたレダはマルクの前に立ちそう言い放った。

「本当にいい迷惑よ！ 全く」

メロンちゃんは腰に手を当てて不機嫌そうな敵を倒して嬉しそうな表情で仁王立ちしている。

「くっ……お前に負けるとはな……俺も堕ちた者だ。この世界でも頂点には立てない……か」

なんか惨めさすら感じられる目の前の人物は地面にがくりと膝をついてしまった。

わざわざ中枢サーバへ乗り込みアंकを奪ってこの世界を征服しようとしたが、いとも簡単にその野望は碎けてしまいました。そんな切ない悪役であるマルク。

「それだけの技術があるならそれをいい方向に使えばいいのに」

あきれたような声で言う妹。中学生に説教されるなんとも悲しいマルク。

やれやれ。

その後はレダがマルクに何か呪文を唱え、マルクは小さな光の粒へと変わってしまった。

どうやらそれが強制ログアウトらしい。

そしてマルクがいた場所には小さなひとつのチップが落ちていてそれがアंकなのだろうと思った。

あまりの小ささに俺が持っていたら無くしてしまいそうな大きさだ。

「もうこれで悪の元凶はいなくなりました。大した被害にならなく

て良かったですよ。被害者などは出ませんでしたし」

全くだ。

これで被害者なんか出てたら大変だ。

「さて、それでは皆さんの能力値を元に戻しておきますね」

そういうと先程と同じようにメニューが開き英字の並びが表示されて消えた。

これだけの間でそんなことが出来ると言うのも驚きだが。

「それじゃあ私の役目もアंकを元に戻して終わりですので私はここから去ることにしますね。皆さんのおかげで被害は最小限に食い止めることが出来ました。ありがとうございます。皆さんはフィンブルの森の入り口まで転送しておきますのでご安心ください。それではまた機会があれば」

そう言うトレダは再び何か呪文を唱え地面に緑の円を出現させ、俺たちを転送させた。

最後まで不思議な人だ。

俺たちが転送されたのはフィンブルの森入り口で、今までの事は何だったのか、よく分からないまま淡々と話が進んでしまい、俺たち4人はただその場で傍聴してました。それくらいのことだったのだろう。

「結局なんだったの？」

妹は算数の問題が解けなかったときのような顔で考えていたが、まあ流されるように悪役を倒したんだろう。それくらいしか俺にもわからん。

「うーん、納得いかないけど、とりあえずは平和になったんだろ？
じゃあ良いんじゃないのか？ さっさとエルポアに帰ろうぜ」

一応敵に止めを刺した功労者であるながやんもそういった自覚は一切無く、むしろ疑問が残りすぎてモヤモヤしているだろう。
メロンちゃんはまあとりあえず帰るかというような雰囲気だ。

結局俺たちはエルポアに無事に帰宅。

何事も無かったかのように美しい夕日が町を包んでいる。

もうよく分からないが、とりあえず考えるのはもうやめだ。
どうせ俺には分からないだろう。

こうしてサンセットの初仕事は終わったのだった。

後日、俺たちは再会されたトーナメントに出場し、見事一回戦敗退という記録を残した。

原因は恐らくチームワークの悪さ。

俺と妹の近接距離での攻撃による接触、ながやんの魔法不発などなど。

結果的に回復役のメロンちゃんは出番なし。
散々だ。

「全く、三人とも何やってるの！？ トーナメントだから負けてもレベルは1に戻らなかったけど、それでもレベルが足りないってことね」

出番の無かったことで不満が更に乗算されたメロンちゃんは不甲斐無くやられてきた俺たち三人に向かってその不満を晴らしていた。

「だつてアツシが……」

妹は俺と接触して倒れたところを敵の魔道士にやられてしまった。猫耳というジョブは本来回避能力に優れているのだが、味方との接触はまさに予想外だったようだ。

まあ要するに俺のせい。

そしてそんな俺もその接触して倒れたときに敵の剣士にやられるという散々な結末。

「それで二人ともいなくなっちゃって俺一人が三人に袋叩きにされて終わり。ちよつと酷い終わり方だよなあ」

ながやんは頭を掻きながら苦笑い。

「こうなつたら……徹底的に鍛えて次の試合では優勝よ！　そうするしかないわ！　この胸の不快感を取り除くには練習あるのみよ！　よおし、そうとなれば早速いくわよ！　レベル上げ！」

そう言いメロンちゃんは俺たちを連れて再びフィールドへと足を運んだ。

どうやらまだまだこのゲームはクリア出来そうに無いな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4545b/>

ブレイバー

2010年10月10日13時43分発行